

巻頭言

ヒトの一生とアディポサイエンス

浜松医科大学小児科学講座

大関 武彦

心筋梗塞や脳血管疾患は大部分が成人期・老年期に発症することから、肥満はこれらの年代の医療において大きな課題となっている。これに加え、近年では若年者や小児の肥満が注目されるようになり、小児のためのメタボリックシンドロームの診断基準も策定された。乳幼児期から小児期、思春期における肥満の診断や介入について、世界的に研究が進められている。このように成人のみならず若い年代における肥満についての関心が高まってきた理由は何であろうか。

成人の肥満の診療や研究がより詳細に行われるにつれ、それらが全面的に、ないし少なくとも一部は小児期に起源を有しているとのエビデンスが増えているのも大きな理由であろう。肥満を生活習慣病としてとらえるとすれば、ライフスタイルは幼い時期から積み重ねられているものであり、その予防において小児期はcritical periodの1つとして大きな影響を与えるといえる。

肥満について古くは、ドナウ河畔で発見され、ウィーンのNaturhistorisches Museumに所蔵されているVenus von Willendorf が知られている。その意味するところはさておき、著しい肥満体型であり、紀元を遡ること2万年以上も前に作られたとされる。エジプトそしてギリシャ時代になるとすでに成人肥満は医学的な関心を集めていたと推測される。小児の病気については紀元前1550年頃のEbersパピルスの記載が最も古いとされ、いくつかの小児科の疾患について述べられているが、小児肥満についての明確な記述はその後余りみられない。

17世紀になるとスペインの画家 Juan Carreno de MirandaがPrader-Willi症候群とも考えられる女児を描いている。1837年にはCharles Dickensが小説Pickwick Papersを出版し、Pickwickian症候群の由来となる換気不全をとともなう肥満小児を登場させ、むしろこれらの医学以外の記載が目にとまるともいえる。医学領域においては小児肥満の中でも初期には各種の症候群が注目され、20世紀に入るとFroehlich症候群(Froehlich 1901)、Bardet-Biedl症候群(Bardet 1920; Biedl 1922)などが記載された。チューリッヒ留学時代の我が敬愛するMentorであったAndrea Praderが自らの名を冠したPrader-Willi症候群をはじめ報告したのは、第二次大戦後である(Prader, Labhart, Willi 1956)。すなわち、その頃までは症候群などともなう先天性の肥満が小児では重要であったといえよう。

現代においてもこれらの基礎疾患を有する症候性肥満は、小児科診療において見逃してはいけない重要疾患であるが、やはり“endemic”とも形容される近年の小児肥満の著しい増加は、生活習慣病としての側面を大きく浮かび上がらせている。小児の肥満、そしてメタボリックシンドロームは子どもたちの健康と深くかかわっていると同時に、成人へつながってゆくことを強く認識すべきである。生活習慣の基礎づくりの時といえる小児期は、その後のライフスタイルの形成に大きく関連することが容易に理解されよう。戦争、飢饉、貧困などの社会的な危機は、成人に比べ子どもたちにより大きな影響を与えることが知られている。いわゆ

る「現代的な生活」にさらされ、小児のライフスタイルには想像を越える大きな変化がもたらされている。喫煙習慣(喫煙経験率：中学1年 男/女, 29.9/16.7, 高校3年 55.6/38.5%), アルコールの過剰摂取(16歳の定期的飲酒：25%, 英国), ゲーム機器の氾濫(主要ゲーム機累計販売台数：3900万台), 偏った食事と過栄養(40年間での動物性脂肪摂取増加：約400%)などの例を挙げるまでもなく、小児期・思春期の生活習慣の激変はその後の一生にとって本質的なかわりを有しているといえる。

ライフステージのスタートラインとしての小児肥満の重要性について、これまでわれわれは繰り返して主張してきた。内科などの成人肥満を診療する研究者のなかからも、小児肥満の意義についてのコメントが聞かれることも最近では少なくない。これは成人期の生活習慣病を十分に把握すればするほど、それが小児期から各ライフステージを経て老年期までつらなっていることに気づかれるからであり、広い視野を有していることの証しであるともいえよう。胎児期の発育がエピジェネティックな機序を介し、成長後のメタボリックシンドロームのリスクと関連するとの研究もなされている。それぞれのライフステージにおける肥満についての研究を交流させ、そして統合することにより、新たなアディポサイエンスを展開させる可能性が広がってゆく。

日本肥満学会は本年度で第30回の記念すべき学会を迎える。これまで本学会を育ててきた先輩諸氏から、今後の学会活動の中心となるべき若手研究者までの各世代の日本肥満学会員の発表と討論が期待されている。各ライフステージに特徴的な肥満が存在するのと同様に、それぞれのジェネレーションの研究者の独自の活動が包括されることにより、肥満研究そしてアディポサイエンスにおける新しいエポックの創造がなされることであろう。